

# 御殿堰 大黒天便り



## ◆第二一号◆

山形市中心市街を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。



「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など『なるほど!』と読んでいただける内容をお伝えしていきたいと思っています。今回は第二一号です。

## ◆御殿堰二周年◆

オープン2周年を迎えたゴールデンウィーク期間中、多くのお客様にお越しいただきました。

元やまがた舞子「音華(ののか)さん」制作のかんざしや和小物、植物を肖像画のように精密に描くポタニカルアート。四季の吊るし飾り、それぞれを展示した『四季の彩り展』も大変ご好評をいただきました。

また、ゴールデンウィーク期間中毎日行われていた「人力車に乗ろう」では、小さなお子様から大人のお客様まで写真を撮ったり実際に乗車したり楽しんでいただけました。今後とも、水の町屋七日町御殿堰を宜しくお願い致します。



## ◆湯殿山神社例大祭◆

湯殿山神社例大祭は、通常五月一八日に開催されます。今年も例大祭に向けての稚児舞の練習が始まっているそうです。四歳〜一二歳まで一七名が練習を経て本番に備えます。

昨年は、水の町屋御殿堰でも『稚児舞』を披露していただきました。御殿堰の水の流れ・柳の新緑・稚児舞の衣装の色彩、和の雰囲気ですととて素敵な空間でした。

里之宮湯殿山神社は、明治九年初代山形県令三島通庸によって旧県庁舎の守護神として勧請し、山形市旅籠町の雁島の地に祀られました。以来県都山形の神社として広く崇敬を集めています。

戦前戦後の祭礼は、神輿渡御をはじめ、見物小屋や露店が数多く出され、年に一度の楽しみ事として、氏子をはじめ近郷近在の人々の参詣も多く、山形の中心街の祭りとして賑わっていました。

例大祭では、大人神輿・子供神輿を神門前に奉安し、発輿祭が行われます。それが終わると神輿の頭が音頭を取り、木遣が奉納され、拍子木の合図で「ソイヤ、ソイヤ」の掛け声とともに、勇壮な神輿渡御が始まり、子供神輿と稚児行列も同道します。



## ◆御殿堰の生き物◆

水の町屋七日町御殿堰には、約四百年間変わらず流れて続けている『御殿堰』があります。

堰沿いでは、春の到来に合わせて様々な色の緑色を見ることができるようになりました。

- ・柳の新緑
- ・苔のふかふかとした黄緑色
- ・竜のヒゲの深い緑色

石積み御殿堰をじっくり眺めながら歩くと、石と石の間から様々な植物が芽を出してきていることに気づきます。今年も昨年と同じ場所から「アメリカフロ」の芽が出てきているのを発見しました。きつとまた可愛らしい桃色の花をつけてくれることでしょう。

現在は白い花が咲いています。なんとという花なのでしょう。

水の町屋御殿堰には、思いがけぬお客様がいらっしゃることも。カプトムシ・コウモリ。

そんな日々の発見を、七日町御殿堰のホームページにて写真付きでお知らせしています。

『御殿堰の生き物』というページが更新された日は、ホームページのニュースに最新情報をお知らせしますので是非ご覧になってみてください。



## 山形あれこれ

### ⑩ 職人町 その一

山形城主最上義光は文禄二年(一五九三年)に城下町を築きました。

馬見ヶ崎川のつくった扇状地末端に城を築き、周囲約一〇キロの三の丸堀をめぐらし、外側に町人町を設け、市日をきめて街の発展を考えたのです。その外側に町の発展を目指すために職人町を設けて、伝統工芸職人のくらしを優遇し、手技の向上を図ったのだそうです。

職人町の性格は、待や町人のくらしに物資の供給を円滑にする役割を持ちます。つまり、生活必需品を作ること。

また、職人たちは物資を移出して外資を獲得する努力をしなければならなかったために、城主は職人に諸役免除を与えたことから、御免町と言われてきた。

火を使う鍛冶師や銅冶師を、山形城下の中央(文翔館前東西の道路あたり)を流れていた馬見ヶ崎川の北側に移住させたことは、現在の工業団地づくりに似ている。鉄砲町や弓町などは外敵防止を兼ねて、城下町の出入口に定めている。八日町などの旅籠町のある町、寺社の多い所には大工町(二日町南)が作られているのも城下町の計画に合致したと言えるでしょう。

鍛冶町 桶町 六十里 材木町

塗師町 舟賀町

得物町

次号の発行は六月七日です。来月も皆様と紙面でお会いできるのを楽しみにしています。